琉球大学学術リポジトリ

何をどう見せるか　ウガンダ・カリンズ森林のエコツーリズム

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学院観光科学研究科
	公開日: 2012-01-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 古市, 剛史, 橋本, 千絵, Furuichi, Takeshi, Hashimoto, Chie
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002006797

観光科学　第３号（平成23年９月）pp. 79－81
Journal of Tourism Sciences. Vol.3 (September. 2011)

何をどう見せるか
ウガンダ・カリンズ森林のエコツーリズム

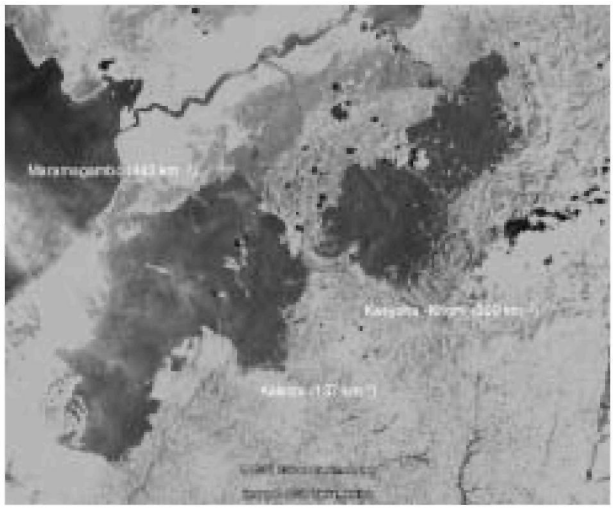
What and How We Can Show? Ecotourism in the Kalinzu Forest Reserve, Uganda

古　市　剛　史、橋　本　千　絵*
Takeshi Furuichi, Chie Hashimoto

近年、地域の森や動物を守る方法のひとつとして、世界各地でさまざまな形のエコツーリズムが導入されてきている。しかし、にわかに脚光を浴びるようになったエコツーリズムも、決して魔法の杖ではなく、地域の特性や観光客側のニーズ、さらにはエコツーリズムの導入による功罪両面での影響などを注意深く検討して実施しないと、なかなか成功はおぼつかない。また、かりに軌道に乗ったとしても、エコツーリズムがもたらす地元への利益は意外に小さく、たとえばアフリカのゴリラの保護関係者などの間では、これ以上のエコツーリズムの導入は考えるべきではないとする声も多いと聞く。また、エコツーリズムという言葉の定義もまちまちで、環境負荷の小さなツーリズムによって自然保護に貢献するというものもあれば、自然を見せるツーリズムはみんなエコツーリズムだというような感じで使われていることもある。本報告では、私たちが実践してきたウガンダ共和国カリンズ森林におけるエコツーリズムを紹介し、これらの問題点について検討を加えた。

カリンズ森林のエコツーリズム

カリンズ森林保護区は、ウガンダ共和国の首都カンパラの西方、道路上の距離で370キロほどのところにある。この地帯は、アフリカ大地溝帯の尾根上にあたり、かつてはベルト状の森林が南北につながっていたところである。しかし現在は、国立公園や森林保護区として、わずかな森林ブロックが孤立状態で残っているにすぎない。



農作地帯に取り残された森林ブロック。
左下のブロックの右側部分がカリンズ森林保護区。

国立公園とは異なり、森林保護区は森林資源の持続的利用を目指して管理されている森林である。林班ごとに利用目的が設定され、生産ゾーンと呼ばれる林班では、計画的な選択的伐採が定期的に行われる。私たちが1992年にチンパンジーの研究を開始したエリアもこの生産ゾーンに含まれており、ある程度の伐採が行われることは予想内だった。

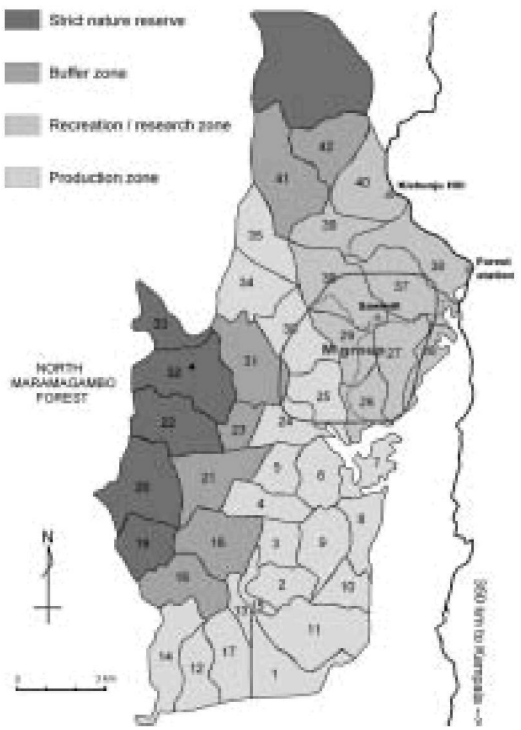
しかし、1998年に伐採が始まってみると、それは予想を超えるものだった。選択的伐採とはいいながら、伐採権を買った木材会社の作業員が多数森林内に住み込んで林床を踏み荒らし、伐採した木

＊ 京都大学霊長類研究所

を製材するための足場を作るために、本来伐採対象になっていない細い木が大量に伐採される。あまりの惨状に、伐採を許可した森林局も、一時伐採を中止して対応を検討することになった。

伐採権の販売によって森林局にもたらされる利益を調べてみると、年間わずか50万円ほどだった。そこで私たちは1999年、この森に住むチンパンジーなど6種の霊長類などを観光客に見せるエコツーリズムによって年間50万円以上の利益を継続して得るという計画を森林局に持ちかけた。そして日本の大森石油株式会社から資金的なご支援をいただき、森林局との共同プロジェクトとして検討を開始することになった。

エコツーリズムの導入に関する手続きは、古くから欧米とのつきあいのあるアフリカでは日本よりはるかに整備されている。2001年から対象地域に隣接する全村落を対象とした利害関係分析などをすすめ、2003年には、天然林に近い森林が残っている地域を観光・研究ゾーンに変更して研究、環境教育、エコツーリズムの活動を推進するという計画が承認された。



見直し後の林班図。北東部が観光・研究ゾーンに設定されている。
青い線で囲まれているのは、研究対象となっているチンパンジー集団の遊動域。

少人数ツアーへの付加価値

計画が承認されても、それで終わったわけではない。実際に効果的なエコツーリズムを立ち上げ、期待される収入をあげ続けなければ、いつでもまた元に戻ってしまう。だが、森林でのエコツーリズムには、さまざまな困難な問題がある。

もっとも大きな問題は、サバンナなど見晴らしのよいところのツアーとは異なり、動物を見るにはかなり動物に接近しなくてはならず、そのために一度に受け容れられる観光客の数が限られるということだ。実際霊長類を対象とした多くのエコツーリズムでは、１グループの人数が6人程度に制限されているところが多い。そのため、観光客のための宿泊施設などに対する投資は最小限に抑えなくてはならず、かつ１人あたりに支払ってもらう料金を上げなくてはない。さらに、たとえ人数を制限しても動物を見られる確率が低く、たとえ見られたとしても短時間で見失ってしまうことが多いため、多くの時間を動物を見ずに過ごさなくてはならないということである。そのため、高いツアー料金を支払っている観光客を退屈させないための工夫が必要になる。

そこで私たちは、少人数の観光客に１週間程度の長期間滞在してもらい、研究者がボランティアとして動植物の生態等に関する解説をしながら霊長類を見てもらうという、研究体験型のツアーを考案して実施している。

村人との共通認識を育てる

エコツーリズムが長期にわたって定着するためには、周辺の村落に住む人々の協力が不可欠である。また将来的には、協力してもらうのではなく、村人自身が主導してエコツーリズムによって利益を得ながら森を守るという形にならなくてはならない。そのためには、この計画の実施に、さまざまな形で村人に関与してもらう必要がある。

そのひとつの取り組みとして、エコツーリズムに、村人の生活を見せるプログラムを組み込んだ。この地域では、未完熟のバナナを蒸してつきくずしてつくるマトケと呼ばれるものが主食となっているが、観光客にバナナの収穫からマトケの調理、鶏などの調理などを村の調理場で一緒に体験してもらい、できた料理を一緒に食べてもらうというものだ。このプログラムを実施することにより、これまで外国人がほとんど訪れなかった村に観光客が訪れるようになり、様々な形での交流が促進されている。ただ、最初は歓迎ムード一色だったこのプログラムも、何度となく繰り返されるうちに、サービスの内容や料金設定などの問題も起こってきている。

ふたつ目の取り組みは、村の将来を担う子どもたちに、自分たちがもっている森林の価値を正しく理解し、将来にわたって有効に利用してもらうための教育活動である。そのために、日本外務省の資金援助をうけて森と村の間に環境教育センターを建設し、月例の講演会、日曜日ごとのオープンスクール、隣接する村を回っての訪問講演会などを行っている。これらのプログラムでは、自然保護の必要性についてのメッセージを画一的に発するのではなく、子どもたちにさまざまな対象についての学習の機会を与え、幅広い視野に立って自分たちの村と森を見ることのできる人に育ってもらうことを目標としている。

もうひとつの取り組みは、森林保護が村人の生活に与える影響の、定量的把握である。隣接する村から標準的な生活をしている家庭を多数選び、その家庭を出入りするものの量を1年間にわたって毎日記録してもらって分析した。これにより、村人が森から得ている食材がきわめて少量であること、薪については半分程度を村のまわりの植林地帯から得ており、残りの半分も森林から得る枯れ木でまかなえていること、自給できない食材はほとんどを近くの市場で購入しており、エコツーリズムや研究活動によって賃金等ある程度の収入が得られれば、森林の利用を制限することによる生活への影響はほとんどないことが確かめられた。この方法には、村人自身がデータを取ることによって、我々と認識を共有するという効果もあったと考えている。

今後の問題点

立ち上がりの段階ではまずまず順調な滑り出しを見せた本計画だが、大きな問題もかかえている。まず、この計画によって利益を受ける村が、森林の出入り口に位置する一部の村に限られているということである。実際この村の周辺では密猟・密伐などの活動もある程度抑制されているが、恩恵を受けられない遠隔の村の周辺では、違法行為もあとをたたない。どういった形で周辺地域に広く利益を還元するかが大きな問題である。

森林局との関係も難しい。伐採権料を上回る収益を上げるという目標は達成し続けているものの、それならもっと大きな利益を上げたいという要求は当然起こってくる。これに応えるために、研究対象としてきたのとは別のチンパンジー集団を人づけし、多数の観光客の日帰りツアーを受け入れることになったが、チンパンジーに対する悪影響をおさえつつ十分な収益を上げるというバランスをとり続けるのはきわめて難しい。

そして何よりも、こういった諸問題を森林局なり地元コミュニティなりが主体的に解決するという体制は、まだまだ確立されていない。そういった体制が確立されるかどうかが、この森林の将来にわたる存続の可否を決めることになるのは間違いないだろう。